
解り合うなどむりなのだ（白い彼岸花蓮編）

バルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

解り合うなどむりなのだ（白い彼岸花蓮編）

【Nコード】

N6558U

【作者名】

バルル

【あらすじ】

白い彼岸花にでてくる、変わり者の蓮の幼い頃の話。ボーイズラブ的な表現はないです。でも本編がそうなので一応タグつけときま

す。

最悪の出会い

楠木家は、江戸時代から続く名家で、曾祖父が立ち上げた会社は時代の流れにうまく乗り、世界中と取引する大企業になった。

いずれこの大会社の跡取り社長になる楠木正孝は今年17歳、真面目頑固がとりえの型物で…努力を惜しまず勤勉。高校2年になるまで誰にも首席を譲らず、これから先も譲るつもりもない…絵に描いたような優等生であった。

そんな優等生の正孝の父、現社長の正弘に…まさか隠し子がいたなんて青天の霹靂。ましてその子を家で引き取り育てるはめになるなんて。父のしでかした事とはいえ…許しがたいとは思いつつ、楠木家の一員として冷静に物事を受け止め、善処するしかない正孝は、正座で応接間に座り、自分の義理の弟となる子供が部屋に入ってくるのを待っていた。

和を基調とする家の間取り。応接間は15畳ほどの広さで、床の間には曾祖父の趣味で集めた日本刀や壺掛け軸などが飾られている。庭に面した襖は開けられて、今春綺麗にさいた桜がひらひらと舞い散り、整備された庭池へ花びらを降らせていた。池の中には、祖父が酔狂で買い集めた何百万もする鯉が100匹程…その肥えた体はツヤツヤと光り輝き…水面を揺らしていた。

「ん？」

自慢の庭に…一人の少年が入って来た。茶っこい髪の毛がさらさらと長めでまるでハーフみたいな顔つきの細っこい子供だ。Tシャツに短パンとラフな格好はこの庭園には似合わない。家の中から正孝

が見ているなんて思いもしないのか、少年は目に付いた桜の樹の太い枝にぶら下がりユサユサとオラウータンみたいに桜の枝を揺すり始めた。あまりの暴拳に正孝はあんぐりと口を開けて…その様子を見ていた。少年が益々加速し、枝がミシミシ悲鳴を上げる。

「あ…あぶなっ…」

正孝が立ちあがったのと同じくらいに、少年は折れた枝とともに、どぼんと勢いよく池に落っこちた。正孝は色んな意味で青ざめて、庭に飛び出て少年を救おうと池に駆け寄った。池の中では、少年は器用に立ち泳ぎをして両手には鯉を捕まえてバタバタしていた。

「な…何をしてるんだ…君は！？早く上がってきたまえ」

両手に捕まえている鯉はよりにもよって、こないだ父が買ったばかりの700万以上する鯉だ。背びれに傷がついたら一気に値崩れ…正孝が益々青ざめて少年を睨みつけた時、玄関の方から使用人の小坂が駆けて来た。

「正孝様…ぎゃっ！」

小坂は池で泳ぐ少年を見て悲鳴を上げた。それはそうだろう…この楠木家始まって以来、池で泳ぐ者など見た事はない。

「れれれ…蓮様っ！何て事をっ」

小坂は急いで少年を池から引き上げた。ベタベタに濡れた小坂はがばっと、正孝の前に土下座した。

「正孝様、申し訳ございません」

「いや…別に構わないが…その子は？」

嫌な予感しつつ、正孝は小坂に訪ねた。小坂は益々縮こまり頭を地面にこすりつけながらまったく面目ないといった様子で

「弟君の、蓮様です」

と予想通りの言葉を吐いた。溜息が自然と口から出る。自分の弟と言われた少年を見ると、びっしょびしょに濡れた体で悪びれもせずそばを向いている。なかなか良い根性をしているようだ。正孝は眉毛がつり上がるのをなんとか堪え蓮に話しかけた。

「やあ…初めまして。僕は楠木正孝です。これからよろしく」

握手してやろうと差し出した手を蓮は、思いつきりバチンッと叩いた。じんじんと指先が痛んだ。正孝はまさか差し出した手を叩かれるなんて…そんな事初めての体験で…動揺して、内心むっとするのを押えられなかった。なんて無作法な子供だろう。こいつの母親はどういう教育をこいつにしてきたんだ。挨拶くらいまともにできないのか…

「ああ、蓮さまっ。何て事を…正孝様に謝ってください」

小坂が益々青ざめて蓮に謝罪を要求すると、蓮は茶色の髪をぶるぶると振って、水しぶきをワザと飛ばし、避ける正孝を見てふんつと笑った。

(なるほど…僕と仲良くする気はないって事か)

正孝は父譲りの切れ長の鋭い目をすつと細めた。そちらが拒絶するというなら、こっちからどうして譲歩せねばならないのか。このうちの長男は自分なのだ。こんな無作法な子供に構っている時間などない。正孝はそう判断した。

「小坂、蓮君をお風呂に入れてあげなさい。お話は夕飯の時でもいいでしょう」

そう言って、正孝は家の中に入ろうと踵を返した。庭に、足袋で出るなんて自分らしくない。茶色く汚れた足袋を脱いで家の中に入り、廊下の途中で合った女中の鹿島に手渡した。鹿島は不思議そうな顔をしたが何も言わず受け取り礼をして下がっていった。

自分の部屋に戻り、障子を閉めて、正孝は深い深いため息を吐いた。あんな子供がこれから家の中をうろつくのかと思うと溜息を吐かずにはいられない。楠木家の家名に傷がつかないよう…自分がしっかりと監視しなければと正孝は思った。

それにしても、あんな子供を家に上げるような不始末をした父が許せない。企業家としては尊敬できるが、女性関係はどうしてこう問題を起こすのか。正孝の母もとうに愛想をつかし、しっかりと慰謝料をもらって姿をくらましている。次にきたのは、挨拶もできないような子供…母親の程度もしれるというものだ。自分ならこんな無駄な事に労力をかけたとは思わない。そもそも女性は家柄が良くて、従順な女が一番だ。どこの馬の骨か解らないような女と付き合うなんて、父はどうかしてる。遊びにも限度つてもものがある。外国にいてなかなか家に帰って来ない父だが…今頃はまた違う女を横に置いているにちがいない。正孝は無性に腹が立って仕方なかった。

「俺なら…バカな女なんか選ばない…」

自分の母も馬鹿だ。…金につられて付いていく女は皆バカだ。あいつの母親もきつとバカな女なんだろう。自分の力でのし上がってやるうなんて女はきつと父は嫌いなんだろう。しょせんお飾りの…顔だけの中身のない…そこまで考えて、正孝はちつと舌打ちをした。

こんな事を考えたってそれこそ無駄というものだ。父の性向なんて自分がどうこう変えられるものではない。今さらな話だ。物ごころついた頃にはもう家に寄りつかなかった父。たまに帰ってきたとしても正孝に関心なんかない。学業さえしっかりできていれば…なにも文句は言われない。正孝はくしゃつと、自分の服を握りしめた。無視される事には慣れている。父に今さら愛情を求めようなんて思わない…子供が嫌いなら作らなければいいのに…きつと、家の跡取りの為にだけに用意された自分。あの子だって…いらぬ子供だったにちがいない。

小学生の頃に気付いた真実、正孝にとって今の蓮くらいの時が一番辛かった。一番傷ついた時期。それを通り越して、やつと穏やかに日常を過ごす事ができる年になったのに、またあの嫌な気持ちが胸をせり上がってくる。

(あいつを視界にいれたくない…)

正孝は、胸の中の靄の原因を作った蓮を厭わしく思わないではいられなかった。ぎりりと奥歯を噛みしめ気持ちを落ちつけようと、立ちあがり、食堂へ向かった。

長い廊下を歩いていると、女中の鹿島が正孝を見つけお辞宜をした。

「正孝様、そろそろ夕餉のお時間です」

「ああ…丁度良かった、今何か飲もうと思つてたところだ」

鹿島は楠木家で働く女中の中では年若い方だ。15で奉公にきてからずっと正孝付きの女中として働いている。今年24歳だったか…見目はそう悪くない大人しい女だ。どうせ手をだすなら、こういう女にしておけば…子供の面倒くらいは見るだろうに。ちらりと鹿島をみると、鹿島は顔を赤らめて下を向いた。鹿島はどうやら自分に気があるようだ…まったく、恋など無駄な事をする正孝はいつも自分を控えめに見つめる鹿島に眉を潜めた。分別ある大人ならば、その恋がいかに無駄か解らないのだろうか。自分が鹿島に振り向く事は決してないのに。

振り切るように、足早に歩いて正孝は、食堂の扉を開けた。するとそこには、蓮が先に座っていた。そうだ、こいつと今日からご飯を一緒に食べねばならない。

向かい合う形で席に座った正孝は、目の前の蓮をマジマジとみた。風呂に入って綺麗になったのは良いが、相変わらずくたびれた服をきている。

「小坂、蓮君の服は他にないのか？こんな恰好でみつともない。買ってやれ」

「は…ごもつともで。しかし、蓮様はこの服でないと着ないとおっしゃられるものですから」

正孝は、キツと蓮を睨んだ。蓮は睨まれてひるむどころか、ニヤニヤと笑っている。まったく嫌な子供だ。

「蓮君、身なりは大事だ。きちんとした服を着たまえ。明日、小坂と服を買ってこい」

「服なんて着れりゃいいじゃん」

蓮は正孝を見返して、冷めた口調で言い返した。

「良い訳ないだろう、楠木家の家名を汚すような行動は慎んでくれ。恥をさらすな」

「俺からしたら、家のなかでそんな着物着てるほうが変てこりんだね。仮装してるみたいだ。それに、服はそもそも身を護るために着るのであつて、人に見せびらかす為に着るもんじゃない。だから着られればなんだっていいのさ」

口を開いたかと思えば、屁理屈が出てくる。正孝は、きっと小坂を睨みつけた。

「小坂、なんだこの子は。箸の持ち方も、食べ方も、口調もなにかもが目茶苦茶じゃないか：どういふ教育をうけてきたんだ。こいつの母親は本当に何もできないしょうもない女だな」

感情が高ぶって、正孝は小坂をどなりつけた。小坂は青ざめ、誠に申し訳ないයිですとひたすら頭を下げた。

「ふん、口で負けたら弱いものいじめか：楠木家つてのは本当に立派なんだな」

蓮が冷たい目で正孝をみた。その目線に正孝の怒りは膨れ上がり、

席をガタンと立った。

「僕は君と食事を一緒にとりたいとは金輪際思わない。視界にも入らないよう気をつけてくれ。小坂、教育をしっかりしろ。こいつが本当に楠木の人間ならばなっ」

勢い良く、正孝は部屋を出て自室に戻った。

正孝と蓮との出会いは最悪で、まさか将来、自分の子供を蓮に託す事になるなんてこの時は思いもよらなかった。

陰る夜桜（前書き）

正孝 17歳 22歳

蓮 7歳 12歳

陰る夜桜

楠木家にやってきた、蓮は正孝と一悶着した後から一切正孝と行動を共にしなくなった。正孝もそれで良いと本当に思っていたし、世話をやくのは小坂に任せておけばいい。自分が関わりあう筋合いなどないのだ。あったとしても、その後も放置している父親に何も言われたくもない。幸い、楠木家には離れが2軒あり、本家の裏手にある離れに蓮は住んでいるので全く会う事もなかった。

悪夢としか思えない蓮との出会いを全て無視して、正孝は、順調に己の階段を登り、有名大学へ通い首席で卒業、予想を裏切らず父の会社へ入社し重役についていた。つい先日、父の取引先の社長令嬢と婚約をし、6月には結婚予定だ。何の汚点もない人生とはまさに彼の為にあるのだと正孝の周りの人間は羨望の眼差しを彼に向けた。

2か月後に挙式を迎え…感傷的な気分になった訳ではないが、正孝は急に桜を見たくなくなった…仕事帰り車を降りて家にすぐに入らず、中庭の方へ足を向けた。曾祖父が大事にしていた桜、思春期の時傷ついた心を癒してくれたのはその老木であった。染井吉野の寿命は60年と言われているが…この木は曾祖父の代から変わらさず見事な花を咲かせ、ただ静かに花びらを舞い散らせていた。

正孝が暗闇に目を凝らすと、桜の前に誰かが立っている。

(誰だ?)

怪しく思いつつ、近づくと学生服を着た青年だった。蓮である。な

んでこいつが本家の中庭に居るんだらうと正孝は眉を寄せた。足音に気付いたのか、蓮がふり返った。

「これはこれは…お義兄様、奇遇ですね」

「ああ」

二の句を告げる気もなく正孝はついつと顔を逸らした。そんな正孝の態度など気にせず、蓮は喋りかける。

「もつすぐ、ご結婚なされるそうですね。おめでとつございます」

妙に丁寧な言い方が、あの日の記憶の蓮とはかみ合わない。相変わらず茶っこい髪で、学生服も前のボタンをとめずだらしが無い。だが、背は随分と高くなって体つきも大人へ近づいていた。

「結婚相手は、お父さんの仕事先の方だとか…まったく敷かれたレールの上を順調に走る人だ」

「どついつ意味だ…」

「どついつ意味もなにもそのままです。ただ…少し心配なんですよ」

「ふん、お前に心配されるとは驚きだな」

「貴方を心配したんじゃないですよ、相手の女性をです」

「…子供が偉そうに、もう自分の部屋に戻れ」

正孝はイライラしながら、投げ捨てるように言葉を吐いて、その場を後にした。取り残された蓮はまた桜を見上げ、その花々が優しく散る様を見ながら静かに吐息を吐いた。正孝の自分を下げずむ目を見るたび、蓮は父親から言われた言葉を思い出す。お前を育てるのは自分の義務だと。

小学生の時、父がいる事を初めて母の主治医から聞かされた。だがその父らしき人は母の見舞いに来る事など一度もなかった、そんな人と会いたいとも思わなかったが、保護者を失った蓮にはどうしようもなかった。

葬儀を終え、母の墓の前で父らしき人物は自分にそう言ったのだ。

わずかばかりの期待は木端微塵に打ち砕かれ…義務で養われる屈辱が蓮に芽生えた。楠木家がどんな名家だろうと、決して染まるものかと幼心に誓った。義理兄である、正孝はまさに、父にそっくりで…でもその瞳の中には自分と同じ父への憎しみが見えた。だからといって…解り合えるわけもなく、剃りが合わないまま…こうして時がたつ。

結婚して…子供をうんで…彼が彼の子供を愛せるとは思えない。自分だって同じだ。だって、僕は普通の人ならだれもが知っている父親からの愛情を一つも知らないのだから…

義務で育ち、義務で生かされてきた。

「あなたの様な人に…誰かを愛するなんて出来る訳もない…可愛そうな人だよ…義兄さん」

蓮はそう小さく呟いて、目を伏せた。そう…僕達はきつと可愛そうな子供でしかない。

静かな誓い（前書き）

正孝 26

蓮 16

静かな誓い

正孝が結婚して、何年かした後には子供が産まれたらしいと蓮はひとつてに聞いた。産まれたのは女の子であるらしいが、お披露目などしていないので…はつきりとは解らない。

妻となる人とだって結婚式の時にちらつと会った程度だし、正孝と関わらないようにしている蓮には正孝の家族の事などどうでも良かったからあえて誰にも確認をしなかった。

母屋と離れとは、働く女中も違うのでなんとなく、正孝との不仲をしっている彼女達は蓮に対して必要でないかぎり母屋の情報を持ってこない。よくできた人達だった。

高校に入って、進路は美大へ行こうと蓮は決めていた。絵を描くのが好きであるし、絵を描いている時だけが蓮にとっての幸福だったから。

楠木家に来て良かったと思える事は、春になると、母屋の中庭にある大きな桜の木を思う存分スケッチ出来る事だ。日中、正孝は家にいないのでうっかり出くわす事もないし、柔らかな春の風に包まれ、穏やかな日差しの中、整備された綺麗な池に花びらを散らせる桜は…なんとも美しい被写体であった。

今日も蓮はスケッチブックにパステルで、桜を夢中で書いていた。すると、背後からキュッキュと聞きなれない音が聞こえ、蓮は振り向いた。

そこには、両手いっぱい広げ、舞い散る桜をおぼつかない足で追い

かける小さな女の子が居た。静である。2、3歳だろうか：まだ付きそいが居なければ危なっかしい年頃であるが、周りを見渡してもその子以外影がない。不審に思つて蓮は立ち上がり、背を伸ばして遠くをみると、茂みの奥に女性が倒れている。

蓮は、持っていたスケッチブックを放り投げ、きやつきやと遊んでいる姪っ子をひよいつと抱っこすると、その女性の傍に駆け付けた。

「誰かつ！！誰かいないか！！すぐ来てくれ」

大声で叫ぶと、母屋の方から数人の使用人が駆けつけて来た。

「奥様つ！！大変…主治医を」

「はやく、誰か運ぶのを手伝つて」

すぐさま、正孝の妻である女性は、母屋に連れていかれた。蓮はその様子を静を抱っこしながら見守っていた。じわじわと自分の母が倒れた時の記憶がよみがえる。母も突然倒れ：一週間意識がないままであつけなく死んでしまった。ごくりと唾を飲み込むと、腕にだけかえた姪っ子を見た。静は何が起こっているのかまったく理解できていない様子で、その瞳は無垢そのものできらきらと輝いていた。綺麗な何も知らない瞳：蓮はたまらなくなつた。どうか、どうかこの瞳が曇る事がないようにと祈らずにいられない。小さな姪をきつく抱きしめると、静は大きな瞳をより輝かせてきやつきやと笑つた。

護つてあげたい。辛い事から：たった一人の姪。小さな軟な存在を抱きしめているうちに、蓮にはこの子への愛情が知らず知らず沸きだし、心の中で、この神聖な存在を護りたいという思いが産まれた。

「どんな辛い事があつても：僕は君の味方だよ、静。忘れないで」

この先、どんなに正孝と衝突しようとしても……この子が幸せであればなら
僕は静の味方でいようと、蓮はこの時、小さな温もりに心からそう
誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558u/>

解り合うなどむりなのだ（白い彼岸花蓮編）

2011年10月8日19時29分発行